

南海地震に備える

香川県防災局

乃田 俊信

〈3〉

南海地震とは

【南海地震とその発生確率】

南海地震とは、紀伊半島から土佐湾沖にかけての南海トラフという海溝付近で、過去90年、150年間隔で繰り返し発生しているM(マグニチュード)8クラスの巨大地震です。最近では、1946年(昭和21年)に発生していることから、今世紀前半にも発生する恐れがあると危惧されています。

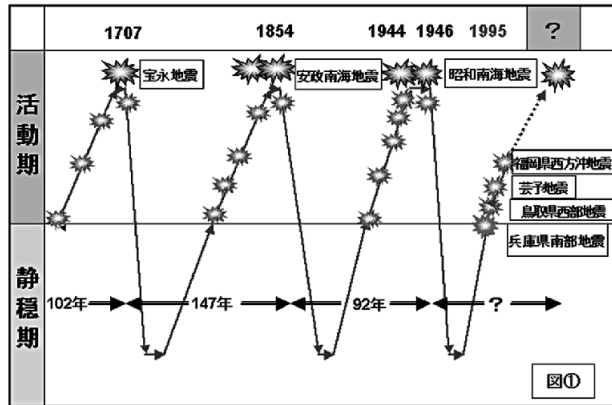
南海地震の発生確率は、今後30年以内に50%、50年以内に80

%と言われています。また、過去の歴史・記録から、南海地震は単独で発生する場合もありますが、同じ南海トラフで発生する東南海地震(紀伊半島沖)や東海地震(静岡県沖)と連動して発生する可能性が大といわれています。

皆さんは、香川県には大きな地震は起きないと思っているのではないのでしょうか?

実際には、7世紀以降記録に残っているだけでも、9回も南海地震と同じタイプの大地震が発生しており、大きな被害がで

活動期と静穏期の変遷(西日本)



るので

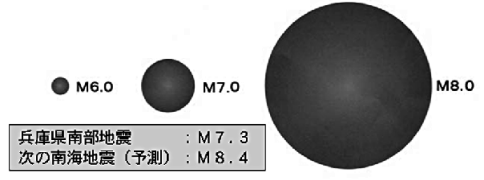
【活動期に入った西日本】

海溝型地震には、「静穏期」と「活動期」が交互にやってきます。いったん南海地震などの大地震が発生すると、たまっていたひずみが一挙に開放され、穏やかな「静穏期」に入りますが、その後徐々にひずみが蓄積し、再び活動が活発な「活動期」に入ります。活動期に入るとたまっていたひずみが各地にM7クラスの活断層地震を発生させるとともに、プレート境界付近のひずみが限界に達すると海溝型の巨大地震を発生させます。最近では1707年の宝永地震、1854年の安政南海地震、1946年の昭和南海地震などの巨大地震を発生させました。

昭和南海地震の後、約50年間静穏期が続いていましたが、専門家は「阪神・淡路大震災を起した兵庫県南部地震以降、西日本が活動期に入った」と警告しています。その後発生した鳥取県西部地震、芸予地震、福岡

地震まめ知識①

【マグニチュードが1違うと地震エネルギーは約32倍】
 ※(マグニチュードが2違うと地震エネルギーは約1000倍)



【体積が地震エネルギーを表す図】

(地震調査研究推進本部パンフレットより)

県西方沖地震などが、活動期に入ったことを証明しています。その後もひずみは少しずつ大きくなっており、その限界、すなわち次の南海地震の発生が間近に迫ってきているのです(図①)。

【次号のテーマ】

次号では、南海地震が発生した場合の被害予測についてお話しします。